

伊吹町文化財調査報告書第5集

長尾寺遺跡測量調査報告書

— 平安時代創建の山岳寺院遺跡 —



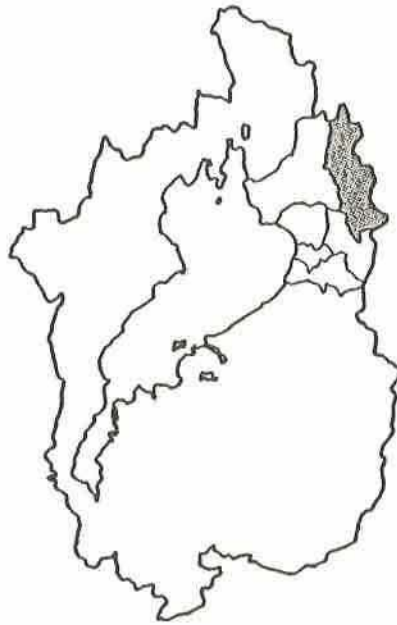
1992. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

伊吹町文化財調査報告書第5集

なが お じ
長尾寺遺跡測量調査報告書

— 平安時代創建の山岳寺院遺跡 —



1992. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

『長尾寺遺跡測量調査報告書』5ページ第2図中に、
誤字がありましたので、ご訂正願います。

誤：上ノ谷 → 正：上ノ山

序

滋賀県の最高峰・伊吹山は、標高 1,377 m の頂きから数条の尾根を琵琶湖に向けて広げ、谷から流れ出る水は山麓に豊かな土地を造りだし、縄文の昔から人々の生活の糧を与えてくれる山でした。

湖北平野の東に位置し周囲を圧してそびえたつその姿は、人々を引き付ける何かがあります。伊吹山寺開基の三修上人をはじめ、現代まで多くの山岳修業者が入山しているのも、その必然性があることなのでしょう。

今回、昭和六十一年度の弥高寺跡に引き続き、大久保に所在する長尾寺跡の測量を行いました。ここには町内でも屈指の美術工芸品が遺っており、早くから研究者の注目を集めてきました。今回は、その全体像を把握することを目的に測量を行いました。しかし、調査はまだその緒についたばかりです。伊吹山寺の解明には、まだまだ多くの研究や調査が必要です。今後も弥高寺跡および長尾寺跡の調査を継続していく必要性を痛感します。さらに、太平寺、観音寺等の関連寺院の究明も急がれます。

幸い長尾寺跡は、地元大久保区民の情熱とご努力によって、非常に良好な状態で遺されてきました。長尾寺跡の解明は、文化財保護だけではなく、町全体の町づくり構想に示唆を与えるものであり、町民一人一人の生涯学習の実践に役立つものであってほしいと念じます。今後も、関係機関、関係諸氏のご協力・ご支援をよろしくお願い致します。

平成 4 年 3 月

教育長 石河竹二郎

例 言

1. 本書は、伊吹町教育委員会が実施した、長尾寺遺跡測量調査の報告書である。
2. 本調査は、平成元年度より平成3年度までの3ケ年間で実施した。
3. 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	伊吹町教育委員会	教育長	石河竹二郎
調査事務局	〃	社会教育課 課長	山田 登（平成元・2年度）
	〃	〃	堀内安夫（平成3年度）
	〃	課長補佐	山本忠明（平成3年度）
	〃	主任	谷口隆一（平成元・2年度）
	〃	〃	藤敦幸子（平成3年度）
	〃	主事	松井富美子（平成元・2年度）
	〃	〃	的場文男（平成3年度）
	〃	技師	高橋順之

4. 本書をまとめるにあたって、下記の諸機関ならびに諸氏には、指導・助言等種々の協力を得た。ここに記して厚く謝意を表する。
滋賀県教育委員会、大久保区、松井捨之進、森下豊一、藤田英男・福永円澄・高橋友彦・的場和夫・草野秀明（伊吹町文化財専門委員）
5. 測量は（株）太進測量に委託した。
6. 調査の記録写真・図面は伊吹町教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆、編集は高橋順之がおこなった。

本 文 目 次

第1章	地 理 的 環 境	2
第2章	歴 史 的 環 境	3
第3章	調 査 の 経 過	7
第4章	調 査 の 結 果	7
第5章	ま と め	16

付 図 長尾寺遺跡測量図

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1	第5図	鐘楼跡・千枚畑付近	14
第2図	周辺の地名	5	第6図	ウシロ谷墓地付近	14
第3図	長尾寺跡平面図	9・10	第7図	長尾寺遺跡出土遺物実測図	15
第4図	毘沙門堂付近	11	第8図	弥高寺跡測量図	17

写 真 目 次

写真1	遺跡周辺空撮	4	写真2	ウシロ谷墓地	15
-----	--------	---	-----	--------	----

図 版 目 次

図版1	(上) 長尾寺遺跡遠望	図版5	(上) 惣持寺
	(下) 集落と遺跡を画す断層		(下) 若宮八幡神社
図版2	(上) 旧毘沙門堂	図版6	(上) 大門跡
	(下) 手水鉢		(下) ドウオンジ跡の宝篋印塔
図版3	(上) 坊跡	図版7	(上) 出土遺物
	(下) 歴代住職墓地		(下) 出土遺物
図版4	(上) 南墓地		
	(下) 新毘沙門堂		



第1図 遺跡位置図 (1,長谷遺跡 2,峰堂遺跡 3,伊吹遺跡)

第1章 地理的、環境

長尾寺遺跡は、滋賀県坂田郡伊吹町大字大久保に所在する山岳寺院遺跡である。

伊吹町は滋賀県の北東部に位置し、岐阜県との県境をなす伊吹山地に抱かれた山村である。町域は東西7km、南北22.7km、面積109.17km²で南北に長く延びる。地形は山林が約85%を占める。町域の北部及び中部は、最北端の新穂山付近に源流をもつ姉川が形成した河谷部からなり、南部は伊吹山（標高1,377m）から流れだす弥高川・政所川・藤古川がつくりだした複合扇状地に各集落が立地する。

町のシンボルである伊吹山は、県下一の高峰で、近江盆地のほぼ全域からその山容を望むことが出来る。特に冬季の雪を戴いた雄大な姿は、霊山と呼ばれるにふさわしく、古くから山岳崇拜の対象であった。

俗に言われる伊吹四カ寺は、仁寿年間（851～4）に三修によって建てられた伊吹山寺が、伊吹山の山腹に展開したもので、長尾・弥高・太平・観音の各護国寺を指す。

弥高寺跡は、伊吹山の南に張り出した尾根上の標高約700m地点に位置している。坊跡と推定される削平地が六十カ所近くあり、県史跡に指定されている。太平寺跡は、山頂から西に張り出した尾根上、標高約450mの旧太平寺集落跡に展開していたものと考えられるが、鉾山の敷地内になっているため詳細は不明である。観音寺（現・山東町朝日）は、おそらく両者の間の尾根筋にあったものと推測されているが明確ではない。長尾寺跡は、太平寺跡が所在する屋根の北隣の尾根が、姉川の河谷部に下りきったところの山麓に展開している。

大久保集落は、町域の中部、姉川左岸の伊吹山地に立地する。この姉川の中流域には二段の河岸段丘が発達しており、連続する下位の段丘上に上下板並、大久保、小泉、伊吹などの集落が立地している。特に大久保集落の山手には、高さ約15～22mの断層が形成されており、長尾寺遺跡は、この断層を下端として扇型に広がる尾根上に立地している。標高約240～325mに中心となる坊跡群が展開し、谷をはさんだ左右の尾根上に付属する遺跡が所在している。

現在、遺跡内にある惣持寺は、長尾寺の塔頭・惣持坊が寺号を称したもので、唯一長尾寺の法灯を護っている。本寺には、伊吹山寺の隆盛を偲ばせる美術工芸品が伝えられており、本町の美術史上からも重要な遺跡といえる。

第2章 歴史的環境

長尾寺の歴史的環境について概略述べてみたい。^①

伊吹山寺の初見は『三代実録』元慶二年（878）二月の条である。これには、仁寿年間に三修が入山して堂舎を建て、元慶二年二月十三日に国家公認とでも言うべき定額寺に列せられたことが記されている。この頃には、奈良時代以来の学問仏教に代って、修行本位の仏教が提唱され評価されているようで、延暦四年（785）に最澄が比叡山に草庵を構え、空海も諸国苦行の末に高野山に入っているのをはじめ、近江でも、己高山寺（木之本町）・天吉山寺（浅井町）・金勝山寺（栗東町）などの山寺が創建されている。

その後伊吹山寺は、四カ寺を中心として発展、展開していったようである。

長尾寺の創建年代は、寺伝によると白雉二年（651）とあるが、もとよりこれは定かではない。観音寺（山東町）所蔵の木造伝教大師座像の胎内銘に、貞応三年（1224）の年号と「大仏師長尾寺住大乘」とあり、これ以前から存在したことは確実である。また、徳治三年（1308）の「伊福貴山弥高太平両寺衆僧和与状」（観音寺文書）によると、伊夫岐神社の一切経会所作人十三人のうち、当寺は三人が務めることになっている。このように、中世には四カ寺が伊夫岐神社の別当として社務を取扱い、祭神を伊吹大菩薩と称したという。嘉暦二年（1327）正月二十二日、後醍醐天皇の令旨が伊富貴社に届き（観音寺文書）、その中に弥高寺・観音寺とともに当寺の名が見える。

『本朝高僧伝』によると、文和年間（1352～56）深宥が当寺に来住し、寺塔の荒廃を嘆いて、壇徒を募り大いに修繕を加え、壯観を旧に復したという。応永七年（1400）当寺と弥高寺の山伏が「伊吹山大乗峯斗藪」の際の宿の決まりを破ったとの理由で、熊野三山検校から「当道之職」を解かれている（観音寺文書）。永享十一年（1439）には、長浜八幡神社の三重塔建立に際し壺貫文を奉加しており（八幡神社文書）、文明八年（1476）の観音護国寺の本堂建立には、脇柱一本を奉加している（観音寺文書）。

長尾寺は永正年間（1504～21）兵火により焼失、のち再建され四十九坊あったといわれるが（坂田郡志）、この頃より衰退を始めていったようで、天文五年（1536）五月の「伊吹大菩薩奉加帳」（伊夫気家文書）には、十七坊が記されている。

元禄五年（1692）六月の調書（坂田郡志）には、

- 一、居屋敷山の半腹東西十二間二尺、南北十二間、寺梁行三間、桁行七間、廂三尺
- 一、堂屋敷東西六十五間、南北三十七間
- 一、毘沙門堂梁行二間、桁行二間半、昔は六間四面

- 一、鎮守権現堂三尺四面、古は二間四面
- 一、新堂、鐘楼、堂塔屋敷、車堂、深宥上人屋敷、地藏堂、以上六カ所悉退転仕り、屋敷計り御座候て、除地に候池之坊梁行二間半、桁行四面
昔は此外二王門等御座候云々

元禄五年六月 大窪村長尾寺之内宗持坊住持義海 印
池之坊住持左京 印

とあって、この頃には既に山麓の寺院だけで、本堂・毘沙門堂・鎮守権現堂と宗持坊・池之坊があり、新堂以下六カ所は跡地のみになっていたようである。

明治九年(1876)四月十三日、集落が大火にあい、里に接した坊(坂田郡志に宝庫と記す)が類焼し、現在は、惣持坊(現在寺号を称す)と山中にある毘沙門堂・権現堂を残す。

また、集落内にある真宗大谷派松音寺は、元禄の調書にある「池之坊」が、その前身である。永正年中の兵火の後住僧は還俗して次郎太夫と称したが、のち福田寺(近江町)門徒となり、天正十八年(1590)一堂を建立。寛文八年(1668)大谷派となっている。同じく大久寺は、源頼朝の臣堀親家が久保に流寓、薙髪して天台宗の寺を建立、慶長年間(1596~1615)誓玄が大谷派に改宗したと伝える。

長尾寺は、もとは法相宗であったが、いつのころからか真言宗となり、現在の惣持寺は同宗豊山派である。

周辺の地名

ここでは、遺跡内及び周辺の小字名・通称名について整理してみたい。

中心となる遺跡が所在するのは、字上ノ山、中森、東川原であり、関連す

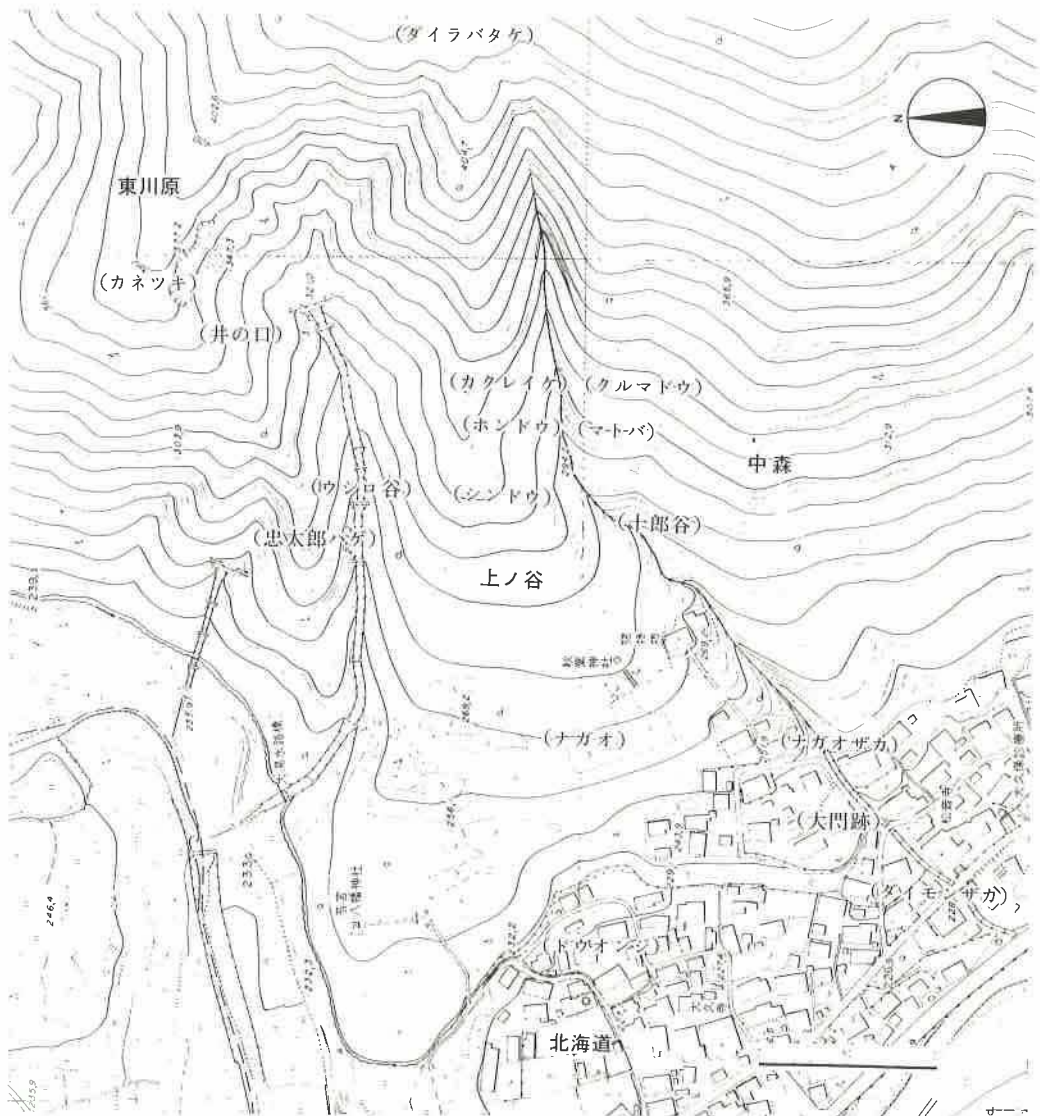


写真1 遺跡周辺空撮

る伝承地が点在する字として北海道、黒谷、ロロシ、野田などがある。

上ノ山は旧毘沙門堂や惣持寺が所在する遺跡の中核である。ここは、通称「ナガオ」と呼ばれており、「ホンドウ」「シンドウ」という呼称が残る。また、北之坊・大進坊・池之坊跡の伝承地がある。また、郡志の記載にある「弘法の水と称する清泉」は、旧毘沙門堂上手の「カクレイケ」に該当するのかもしれない。北にある谷は「ウシロ谷」、南の谷は「十郎谷」と呼ばれる。

遺跡の下手に位置する北海道には、遺跡へ向かう道路脇に大門跡伝承地があり、県道から大門跡までを「ダイモンザカ」、大門跡から遺跡地までを「ナガオザカ」とよぶ。また、



第2図 周辺の地名

階
 の
 イ
 坊
 跡
 は
 て
 水
 て
 迦
 谷
 へ
 赴
 いて
 名
 か
 以
 て
 井
 捨
 屋
 妹
 ノ
 下
 わ
 れ
 の
 こ
 を
 は
 代
 か
 の
 関
 係
 代
 の
 指
 呼
 の

断層の凹んだところに「ドウオンジ」があり、中世に長尾寺の一坊が、ここに移転したものと伝えられている。ここには、鎌倉後期～南北朝頃の宝篋印塔台座が残っている。

「十郎谷」をはさんで上ノ山の南に位置する中森には、「クルマドウ」「マトバ」「ダイラバタケ」「キクジハゲ」等の呼び名がある。「クルマドウ」（車堂）はなんらかの堂坊跡、「マトバ」は的場であり行事に由来するものと考えられる。「ダイラバタケ」は遺跡の背後、標高約 440 m 地点にある。「平畑」であると考えられ削平地も存在する。今回は調査できなかったが、今後確認する必要はある。「キクジハゲ」のハゲとは崩土のことであり、周辺にも「忠太郎ハゲ」「久治良ハゲ」などがある。

上ノ山の北東に位置する東川原には「井ノ口」「カネツキ」がある。「井ノ口」は寺の水源地とも考えられる。「カネツキ」はウシロ谷の北の尾根上にあり、鐘楼跡と伝えられている。

その他注意すべき通称名には、黒谷の「ソンボウ」「テンジンヤマ」、板名古川沿いに遡ると「オクノイン」跡の伝承地や「^{あか}關伽岩」、上流のカリブ谷周辺の「和尚谷」「^{わじよ}醍醐谷」など仏教用語の地名がある。このカリブ谷から「白坂」「三浦坂」を越えて美濃笹又へ抜ける道は最短路である。また、「ホンドウ」からは、修験道の大乗峯である伊吹山頂につづく山道がある。この道中に「トンダテ」「オオセンスイ」「コセンスイ」などの呼名があり、修験道との関係も考えられる。

以上、往時の長尾寺を彷彿させる地名を拾い上げてみたが、当寺には古絵図などが残っておらず、比較検討すべきもない。なお、以上の地名を整理するに当たって、大久保の松井捨之進先生の資料を参考にし、多大なるご教示を得た。記して謝意を表します。

周辺の遺跡

姉川の河谷部における遺跡の分布とその性格は明瞭ではない。しかし、下板並の字長谷ノ下において、縄文時代の石斧が発見されているし、曲谷の起し又遺跡では縄文後期と思われる土器片が採集されている。これらのことは姉川の上中流域においても、早くから人々の生活が営まれてきたことを明確に示している。

この地域の遺跡のほとんどは、姉川沿いの台地上に分布している。当遺跡と、板名古川をはさんで北に位置する下板並集落背後の台地上の長谷遺跡でも、分布調査の際に平安時代から中世にかけてのものと思われる土師器、須恵器、陶器片を採集しており、当遺跡との関係が予想される。また、大久保から南へ約 1.5 km 下った姉川左岸の台地には、縄文時代の伊吹遺跡、寺院跡あるいは城郭跡と見られる峯堂遺跡がある。峯堂遺跡は太平寺跡と指呼の間にあり、両遺跡の結び付きが予想される。

第3章 調査の経過

伊吹山を取り巻く山岳信仰ならびに修験道を解明していくためには、伊吹四カ寺を中心に山中の山岳寺院群の調査が不可欠である。伊吹山寺関連寺院のうち、弥高寺跡は昭和六十一年度に測量と試掘調査が行われ、その概要の一端が判明している^②。今回調査を行った長尾寺遺跡は、四カ寺のうち弥高寺に次いで遺存状況が良く、その解明が急がれていた。しかし、現在までの調査は、県指定文化財の毘沙門天立像・天部立像をはじめとする、美術工芸品や書籍の調査が主体であった。本町内において、伊吹山寺の法灯を今に伝える寺院は、わずかに弥高護国寺の悉地院と長尾護国寺の惣持寺のみである。今後、これらの伝世資料からのアプローチと同時に、考古学的な調査による資料収集が必要であることは言うまでもない。

また、地元大久保区では、平成元年に大久保の史跡を守る会が結成され、「伊吹山仏教文化圏の遺跡・長尾護国寺の全容を確かめ、史跡の継承、保存につとめる」ことを目的に、積極的な活動が開始された。

今回の測量は、これらの基礎となる平面図を作成することを目的に行ったものである。調査は、平成元年度に、中心となる旧毘沙門堂周辺を行い、2年度にはウシロ谷とその北の尾根を、3年度は惣持寺から若宮八幡神社にかけて広がる削平地群を範囲に設定した。背後の山腹に所在する削平地や、集落内の大門跡辺りまで範囲にいれるべきではあったが、諸般の事情により今回は見送らざるをえなかった。

第4章 調査の結果

全体構造

長尾寺遺跡の範囲については、西（下端）を集落に落ちる断層まで、東は「隠れ池」（さらに山腹へ広がる可能性あり）、北は鐘楼跡（E）、南は十郎谷南の削平地群（C）、というおおよその範囲が想定できる。

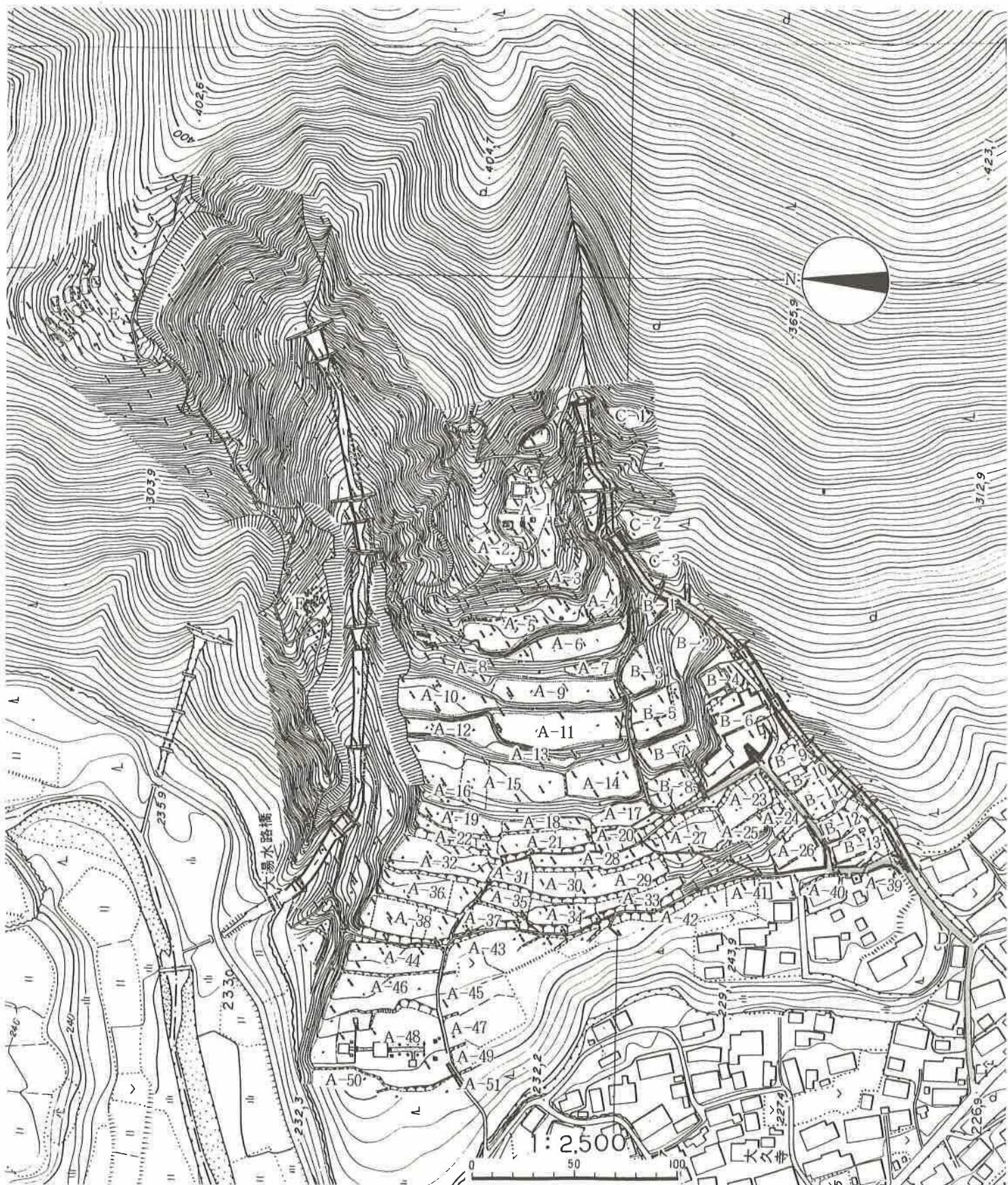
具体的には、中央の坊跡群が東西約330m、南北約300mを計り、さらに、南北の尾根上に鐘楼跡などの遺構が広がっているのである。

削平地は中央の尾根に集中し、約67カ所を確認することが出来た。これらは、地元で「ホンドウ」とも呼ばれる所を中心に扇型に展開している。削平地は、最大が約18m×79

測量範囲内区画一覧表

区画	大きさ(m) (東西×南北)	面積(m ²)	平面形	備考
A-1	約28×25	約 852	長方形	旧毘沙門堂・権現堂敷地、通称「本堂」、東と西に張出部あり
A-2	12×23	276	長方形	緩やかに傾斜、石仏1
A-3	19×9	171	逆L字形	
A-4	26×8	208	三角形	A-5に続く
A-5	15×61	940	長方形	歴代住職墓地、南半分で狭くなる
A-6	12×47	564	長方形	
A-7	6×24	144	三角形	
A-8	4×18	72	長方形	
A-9	10×59	590	長方形	
A-10	13×43	559以上	長方形	北側崩壊
A-11	15×61	915	長方形	(伝)大進坊、北の坊跡
A-12	9×43	387以上	長方形	北側崩壊
A-13	5×40	200	長方形	A-12に続く
A-14	20×32	640	台形	
A-15	18×79	1,422以上	長方形	北側崩壊
A-16	3×18	54	長方形	A-15に続く
A-17	7×27	189	長方形	
A-18	5×43	215	長方形	
A-19	7×41	287	長方形	
A-20	3×35	105	長方形	
A-21	8×46	368	長方形	
A-22	5×41	205	長方形	
A-23	16×25	400	長方形	防火水槽
A-24	12×14	168	長方形	
A-25	7×16	112	長方形	
A-26	16×24	384	台形	宅地
A-27	17×31	527	長方形	
A-28	7×61	427	長方形	
A-29	9×30	270	長方形	A-30に続く
A-30	11×32	352	長方形	A-29・A-31に続く
A-31	11×16	88	三角形	A-30に続く
A-32	14×48	672	長方形	
A-33	6×45	270	長方形	A-34に続く
A-34	9×31	279	長方形	A-33・A-35に続く

区 画	大きさ(m)	面積(m ²)	平面形	備 考
A-35	8×21	168	長方形	A-34に続く
A-36	11×46	506	長方形	
A-37	12×33	198	三角形	
A-38	16×43	688	長方形	
A-39	(6)×25	150以上	長方形	宅地、防火水槽、一部範囲外
A-40	(5)×18	90以上	長方形	元宅地、一部範囲外
A-41	11×41	451以上	長方形	宅地
A-42	3×50	150以上	長方形	
A-43	10×26	260	台形	
A-44	13×45	585	長方形	
A-45	19×(7)	133以上	長方形	一部範囲外
A-46	17×50	850	長方形	
A-47	13×(8)	104以上	長方形	一部範囲外
A-48	22×60	1,610	長方形	若宮八幡神社境内地、西に張出し部あり
A-49	11×(9)	99以上	長方形	一部範囲外
A-50	(11)×22	242	台形	一部範囲外
A-51	(5)×(6)	30以上	長方形	一部範囲外
B-1	19×16	152	三角形	手水鉢
B-2	20×19	380	矩形	
B-3	16×13	208	長方形	
B-4	14×22	308	長方形	(伝)池之坊、新毘沙門堂
B-5	20×24	480	長方形	二区画
B-6	29×27	991	正方形	惣持坊(寺)、北に張出し部あり
B-7	11×28	308	長方形	秋葉神社境内
B-8	15×19	285	長方形	
B-9	10×13	130	長方形	(伝)宝物庫跡、(明治9年焼失の里に接した坊)
B-10	11×11	121	正方形	二区画
B-11	16×12	192	長方形	
B-12	12×14	168	長方形	宅地
B-13	13×20	260	長方形	宅地
C-1	10×20	100	三角形	(伝)車堂跡
C-2	16×(13)	104以上	三角形	一部範囲外
C-3	18×(9)	81以上	三角形	一部範囲外



第3図 長尾寺跡平面図 (1/2500)

m以上、最小が約3 m×18 mで、平均すると12 m×31 mとなる。但し、これら全てを坊跡とみなすことは出来ないであろう。坊跡は、その長軸をほぼ南北に揃えている。削平地は遺跡西端の断層上まで展開し、さらに数が増すと思われる。これらは、おそらく最盛期四十九坊といわれたその跡であろう。

遺跡内の主道については、「ダイモンザカ」から大門跡（D）を通り、「ナガオザカ」を上って、現在の惣持寺に突き当たる。左折して秋葉神社石段を越えたところで削平地群の中央を山頂に向い、一度十郎谷に下りた後、南から旧毘沙門堂（「ホンドウ」）の削平地に取り付いたと伝えられている。同じ伊吹山寺の弥高寺跡の主道は、ほぼ削平地の中央を通り本坊跡に至っている。当遺跡においては、下端が断層となっているために、遺跡の南端を大門にしているが、これはあくまでも地形上の制約からであり、弥高寺と同じ平面プランを読み取することは出来ないであろうか。これについては後で検討していきたい。この主道は、「カクレイケ」からさらに北へ向い、ウシロ谷を容易に越えて、鐘楼跡や五輪塔・宝篋印塔の残る墓地の所在する尾根に続いたようであるが、現在は伊勢湾台風の被害によりたどる術もない。また、削平地相互の道については明確に出来なかった。

旧毘沙門堂周辺

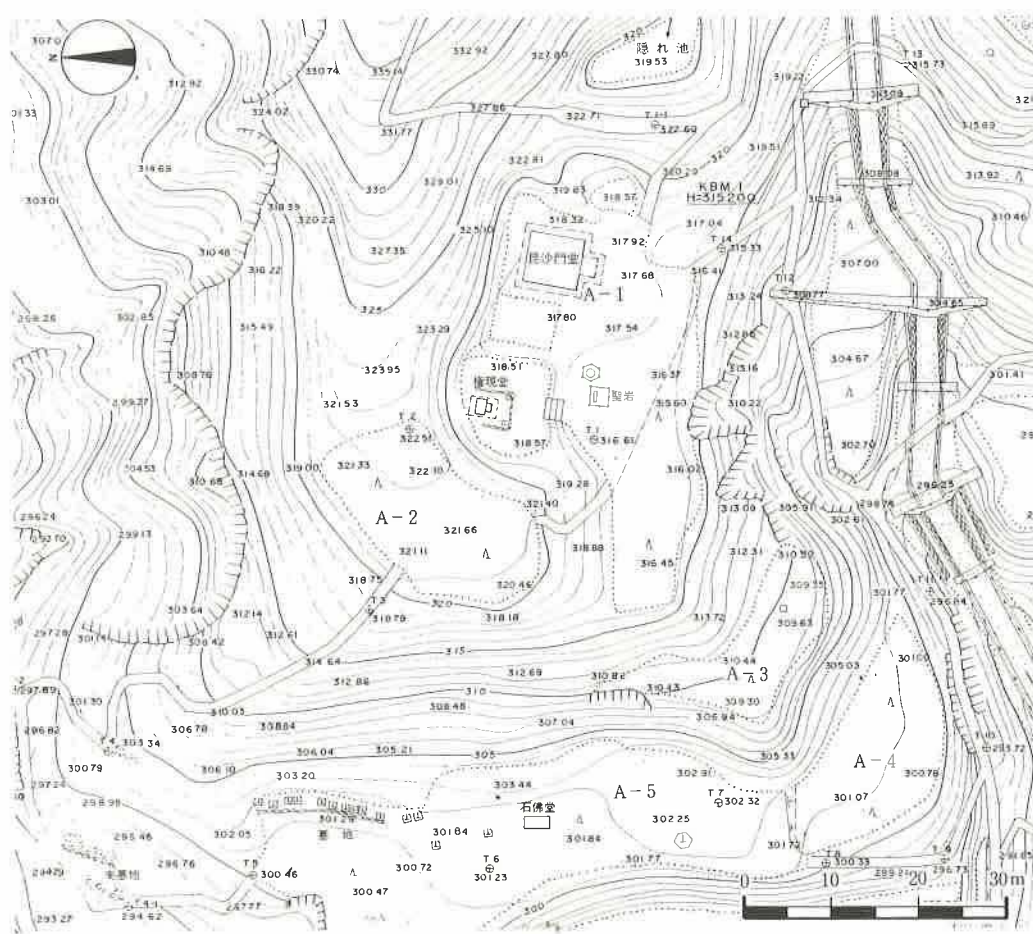
現在、旧毘沙門堂と権現堂が所在する坊跡（A-1）は、地元で「ホンドウ」と呼ばれており、標高約318 m、集落からの比高は約91 mで、南北最大幅約27 m、東西最大幅約49 mを計る。ただし、西は約19 m×約11 mの張出し部になっており、これを除いて考えると南北約27 m×東西約30 mの長方形となる。毘沙門堂と権現堂は、ほぼ南面して建っており、権現堂は10 m四方の高まり上に立つ。この坊跡は、背後の尾根の南半分を削りとり造りだされているようで、北と東西は、この尾根で「逆コの字型」に取り囲まれている。仮に、現在の建物に先行して「ホンドウ」が建っていたとするなら、その建物は三方の尾根に向かうのではなく、かろうじて視界の開く南面を正面としていたと考えられる。それは、集落からの主道が南から取り付くということや、多くの寺院が、南面して経営されていることなどからも予想される。また、下に広がる坊跡群が西に広がっているのに、あえて「ホンドウ」のみ南面しているのは不自然でもあり、南面に固執した結果のようにも思える。

A-1を取り囲む尾根の西端には、やや緩やかに傾斜する坊跡（A-2）がある。ここにもなんらかの施設の存在が予想される。また、A-1の東山手、約4.5 m上ったところに「カクレイケ」と呼ばれる池跡がある。現在水をたたえてはいないが、底部に数個の自然石の配置もみられる。大きさは東西約7 m、南北約11 mで3 m近い落ちこみをもつ。この池跡から北へ上る道は、ウシロ谷を渡って容易に鐘楼跡に取り付いていたようであるが、現在

は深くえぐられており消滅している。

A-1の西下手にある削平地A-5は、東西約15m×約61mの大きなもので、A-4とは約60cmの段差で連続性をもつ。この北の端には歴代住職の墓石群がある。これらの墓石は、江戸期のものが中心で、小さいもので高さ約50cm、ほとんどが100cm前後の一石五輪塔1基と五輪板碑11基である。石材は砂岩または花崗岩で、銘文が読み取れるものが5基あり、それぞれ「中興開山深宥」「寛文三年(1663)」「享保三年(1718)宥海」「享保十三年(1728)義海」「享保十年(1725)」と読める。

さらに、ここから北へ18m下ったところに通称南墓地と呼ばれる墓石群がある。地元の方が手を加えるまでは、ブッシュの中にあつたというが、現在では整然と並べられており、ここから毘沙門堂に続く散策路も整備されている。ここにも宝篋印塔、五輪塔、一石五輪塔の完形品や残欠が3カ所に集められている。「天文七年(1538)」の五輪塔が唯一読み



第 4 図 毘沙門堂付近

は約60
は、江
塔1基
あり、
十三年
地元の
ており、
一石五輪
一読み

取れるのみで、天正期頃と推定される一石五輪塔などが多い。3カ所で五輪塔2、同残欠4、一石五輪塔25基からなる。材質は、やはり砂岩と花崗岩である。同様の墓が、ウシロ谷をはさんで北の尾根上に所在する（後述のウシロ谷墓地）。双方とも標高295 m付近に位置していることに注目したい。現在でこそ、天災により底の抜けた深いウシロ谷に分断されているが、それ以前はもっと浅い谷であったという。推測ではあるが、両墓地は別々のものではなく、長尾寺に付属する墓域としてのまとまった1区画であったのかもしれない。谷の出口付近にある若宮八幡神社境内に集められた墓石の中には、被災後ウシロ谷で発見されたものもあり、それを物語っているように思う。

なお、南墓地ならびに後述するウシロ谷墓地は、昭和五十六年を中心に組織的な盗掘を受け、南墓地はかつて存在した石仏や宝塔のほとんどと一石五輪塔の半数が運び去られたという。

その他の坊跡

ここでは、A-1から集落に向かって扇型に展開する坊跡群のうち、伝承の残るものや現在建造物が残るものについて概略を述べる。

A-11は、東西約15 m×南北約61 mの長方形にまとまった区画である。ここは「北の坊」「大進坊」の跡と伝えられている。大進坊については「伊吹大菩薩奉加帳」（伊夫気家文書）に「大進公」が見える。

A-48には、若宮八幡神社がある。この境内にも石塔・石仏群があり、ここから集落へ下りた道の脇にも石塔の残欠が集められている。特にこの地区には、宝篋印塔の笠や台座が多い。

B-1は南北約19 m、東西約16 mの三角形を呈する小区画である。ここに半分近く地中に埋まった手水鉢がある。花崗岩製であり、上流の曲谷産のものと伝えられている。

B-4は、東西約14 m、南北約22 mを計る。平成元年に新毘沙門堂が建立され、毘沙門天・天部立像（共に県指定文化財）とともに、伝空海像、不動明王像などが安置されている。この削平地は、元禄の調書に見える「池之坊」跡と伝えられている。この下のB-6は、唯一法灯を伝える惣持寺（もと坊）があり、北のB-7には、秋葉神社が所在する。

惣持寺門前から集落へ下りる道（「ナガオザカ」）の左右にも、15 m四方程度の削平地が並ぶ。現在は、多くが山林になっているが、過去に家が建ち並んでいたそうである。特にB-9は、明治九年の大火で類焼した宝物庫跡と伝えられている。長尾寺の宝物について、『近江輿地志略』（1734）に「此寺別して靈寶々器墨跡圖書等多し。十三佛の畫、兩界の曼陀羅二幅、巨勢金岡筆也。」というような記述があり、往時を偲ばせる。



C-1は、坊跡群と十郎谷をはさんで南に位置する削平地で、東西約10 m、南北約20 mで三角形を呈す。「クルマドウ」跡と伝承されている。C-1の下方にC-2、C-3のような削平地を一部確認した。十郎谷の南側にも坊跡群の存在が予想される。

Dは大門跡である。遺跡と集落を画する断層の南端が、ここで十郎谷川に落ちる。現在は、宅地になっておりその痕跡はない。元禄の調書に見える「仁王門」であると考えられる。惣持寺に「長尾護国寺」と書かれた室町時代の山門額（町指定文化財）が遺されており、この大門に掛けられていたものかもしれない。

（伝）鐘楼跡（E）

ウシロ谷北の尾根上、標高約365～380m地点に、地元で「カネツキ」「千枚畑」とよばれる地区がある。「カネツキ」は鐘楼跡と考えられている。現状は、尾根がややテラス状に広がったところで、全体に緩く傾斜している。鐘楼に否定できるようなフラットな面は確認できなかったが、周辺に1 m大の石が八個露出している。その北側に、長軸約5 m～10 m、奥行約2.5 mの小規模な平地が段状に並ぶところが、13カ所あり、地元では「千枚畑」と呼んでいる。ここにも、1 m大の石が集中している個所がみられるが、その性格は不明である。

また分布調査の際、さらに上方において人工のものと思われるごく小規模な石積みを確認した。

「ウシロ谷」墓地（F）

鐘楼跡から約70 m下ったところの尾根上に墓地が所在する。先にふれた南墓地と区別して、地元では「ウシロ谷墓地」と呼ばれている。ここでも、一石五輪塔を中心に宝篋印塔残欠、石仏などが炭窯跡に整理されている。前述したごとく、ここも昭和五十六年に盗掘をうけており、40カ所以上の盗掘坑とばらばらになった石塔・石仏類が墓所一帯に無惨に散乱していたという。昭和五十七年五月二十日に地元有志約64名が、これらを仮安置する作業をおこない現在にいたっている。今回の測量においても29カ所の盗掘坑跡を確認した。

当墓地から出土した遺物については、『伊吹町内遺跡分布調査報告書』で紹介したので、図のみ掲載する。1は瀬戸産の水注、2・3は常滑産の甕、4は渥美産の三筋壺である。いずれも中世のものであり、石塔類と対応するものと考えられる。2のように底に穴が空いているものもあり、墓地出土ということから蔵骨器として用いられたものであろう。

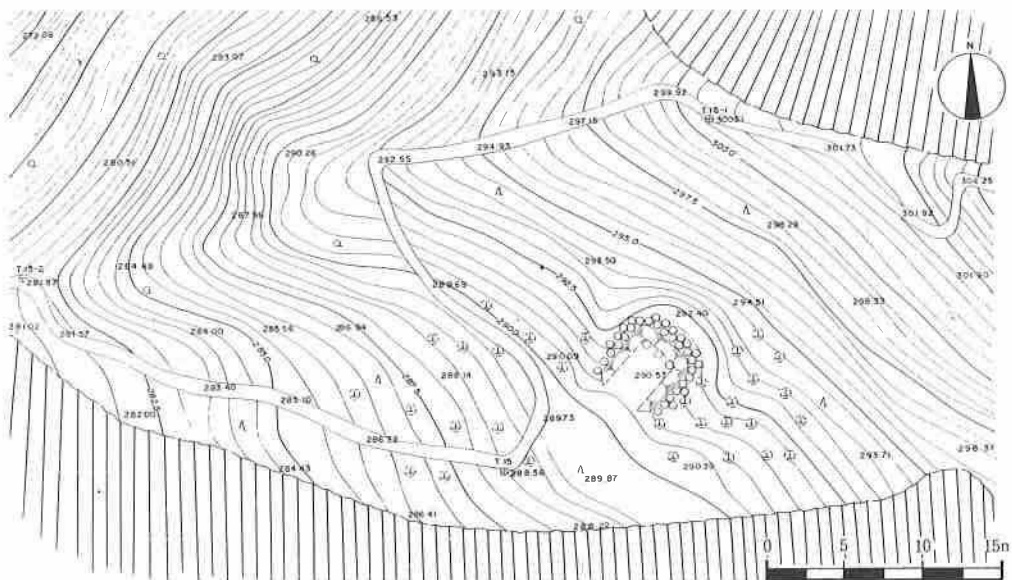
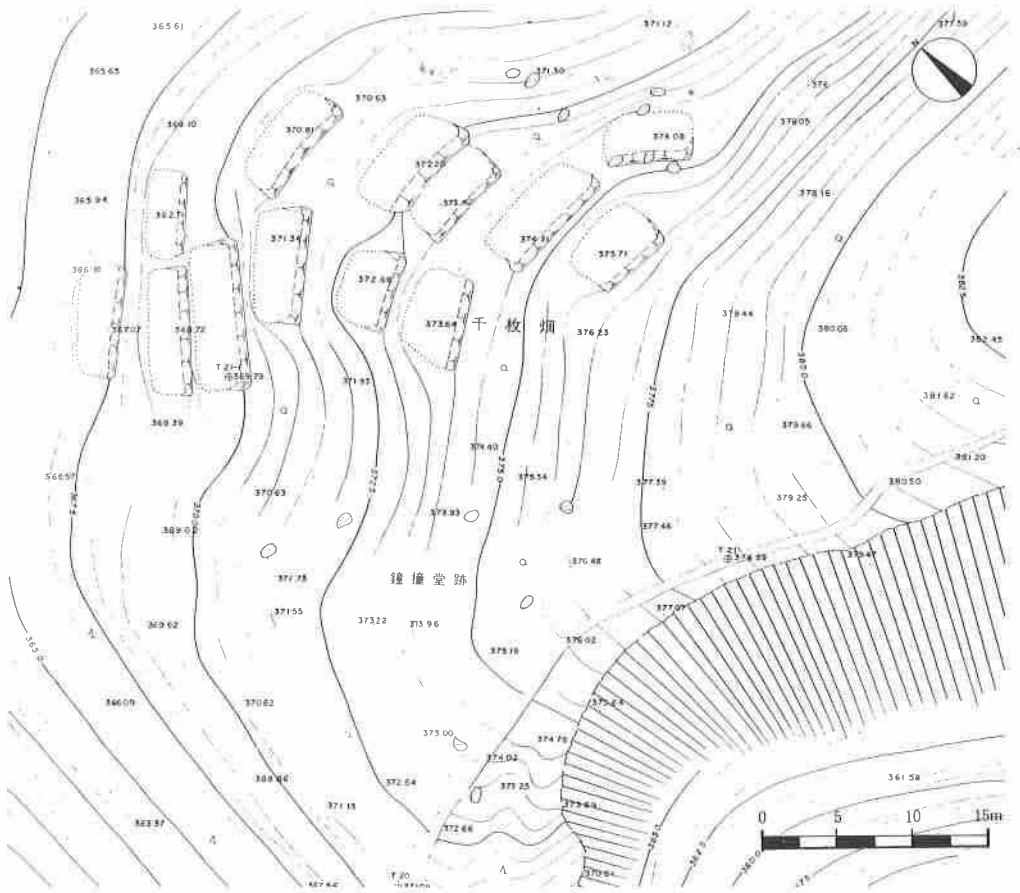
mで
な削

現在
られ
てお

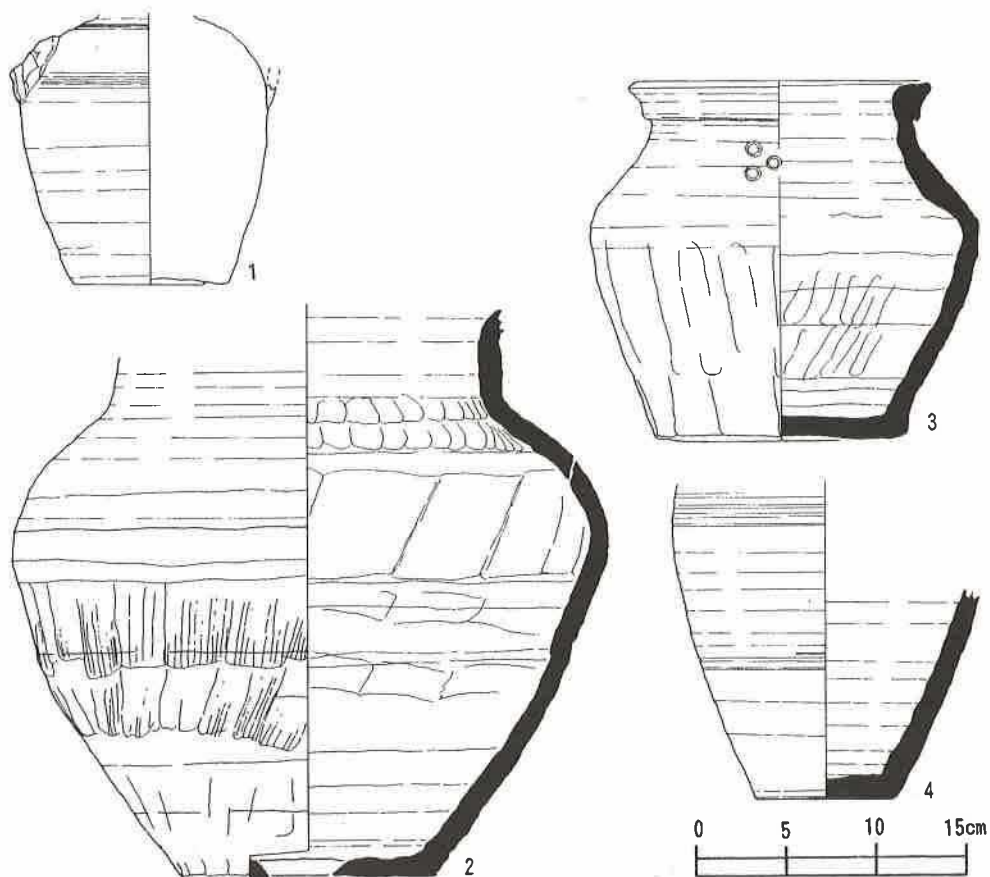
よば
ス状
な面は
5m~
「千枚
性格は

みを確

区別し
篋印塔
に盗掘
無惨に
置する
認した。
たので、
ある。
穴があ
う。



(上) 第5図 鐘樓跡・千枚畑付近
(下) 第6図 ウシロ谷墓地付近



第 7 図 長尾寺遺跡出土遺物実測図



写真 2 ウシロ谷墓地

以
の籠
んら
の参
長
太平
条件
時期
つい
し
行僧
寺跡
奥義
特に
よう
と、
うか
帯に
い、
どか
する
てい
次
調査
寺跡
ので
和与
寺の
他の

第5章 ま と め

以上、平面図をもとにして長尾寺遺跡の検討をおこなってみた。あくまで、地表面だけの観察であり、考古学的な究明が一度もなされていない当遺跡において、まとめとしてなんらかの評価を与えることは無理があるかもしれない。ここでは、今後の調査や遺跡保存の参考にするために、若干の考察をしてみたい。

長尾寺遺跡は、姉川の谷部の山麓に位置している。同じ伊吹山寺関連寺院の弥高寺跡や太平寺跡が湖北の平野部や琵琶湖を一望できる高所に位置していることに較べると、立地条件としてはやや見劣りする感があるのは否めない。一説にいうように、山頂近くに古い時期の遺跡が所在するならば、事情は変わってくるのだが、ここでは今回の調査地のみについての考察であることを断っておきたい。

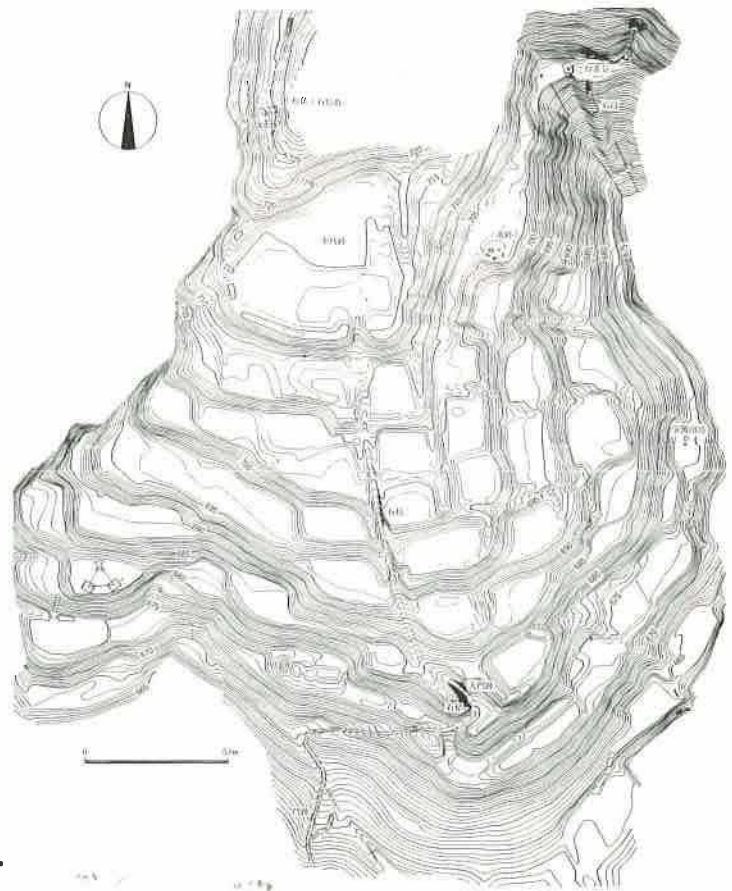
いわゆる山岳寺院とは、「山岳信仰に起源をもち、山岳信仰と一連のつながりをもつ修行僧による仏堂の造立、あるいは天台・真言二宗のひろまり等によって諸国に創立された寺院」^③である。長尾寺はこの概念にあてはまる。一般に山岳寺院の立地といえば、密教の奥義にいう「深山幽谷」の山境を考えるが、山腹あるいは山麓に立地するものも存在する。特に鎌倉時代以降の中世（山岳）寺院は、おおむね、山の中腹に立地しているものが多いようである。このことから、長尾寺遺跡の壮大な坊跡群の構築時期は、その立地からみると、鎌倉時代以降のものである可能性が高い。墓地の石塔や出土遺物からも同様なことがうかがえる。さらに、寺地の選定の場合、その理想的地理条件とされるは、丘陵の扇状地帯に位置し、南方に平地をのぞむところであり、風水の思想にもとづいて、後方に山を負い、左右にも丘陵を配し、全面の平地に河川をのぞむいわゆる四神相應の地であることなどがあげられる^④。長尾寺の場合、扇状の尾根に位置し、左右に付属施設を備えた尾根を配する。また、背後に修験道の大乗峯・伊吹山が、前面には周辺地域をうるおす姉川が控えている。これらが、寺地の選定に関連したものと思われる。

次に、同じ伊吹山寺中の弥高寺跡との比較からの考察を試みたい。昭和六十一年の分布調査および試掘調査において、弥高寺の概要がある程度判明している。報告者は、「弥高寺跡がその規模・内容から伝えられる坊の数などいわゆる伊吹山寺関連寺院を代表するものであろうと推定」している。たしかに、徳治三年（1308）「伊福貴山弥高太平両寺衆僧和与状」（観音寺文書）にみえるように、当時勢力をもっていたと思われる太平寺と本末寺の相論をしたり、応永七年（1400）から約四十年間にわたって、入峰修行の宿について他の三カ寺を相手に争っていることなどをみても、大きな勢力をもっていたことはうなず

ける。そして、「中世の山岳寺院の中で、弥高寺は大規模で最もまとまりのある典型的な例」との評価が与えられている。弥高寺跡は、第8図のように本坊跡を頂点として、扇型に六十以上の坊跡が展開している。その規模は東西約250m、南北約300mである。長尾寺遺跡の場合、中央の坊跡群が東西約330m、南北約300mを計り約67の削平地を確認した。両者の規模はほとんど同じであるといえる。扇型を呈する坊跡群のあり方も同様である。個々の坊跡について平均すると、弥高寺跡の場合20×15m程度、長尾寺が12×31m程度と近い数字を示す。全体規模としては両寺が非常に似ていることがわかる。

次に中枢部を取り上げる。弥高寺においては最大約68×約59mの本坊跡を、長尾寺においては、最大約27×約49mの通称「ホンドウ」(A-1)を中枢部と考える。これを見ると中枢部の規模については、明らかに弥高寺のほうが大きい。さらに、弥高寺本坊跡は高さ1~1.5mの土塁が取り巻き、基段状遺構が伴うことなど、ここで明らかな差が生じる。構造的には、両者の建物がおそらく南面することや東に池跡を持つことなど、共通性が予想される。

他の施設については、墓地は両者とも1カ所(長尾寺は2カ所か)が確認されており、両者とも常滑や瀬戸などの中世陶器が蔵骨器に用いられている。また、弥高寺跡には役小角像を安置する入定窟があり、同じ山岳寺院である大吉寺(浅井町)との共通性が認められているが、長尾寺には見当らない。長尾寺の鐘楼跡については、詳細は明らかではないが、おそらく弥高寺にも存在したであろう。長尾寺は集落に近いため、



第8図 弥高寺跡測量図

「北の坊」「大進坊」「池之坊」などの伝承地が弥高寺に較べると多く残る。

また、寺院本来の機能でないものに、弥高寺跡の一部の土塁、堀切、虎口状の大門など、明らかに城郭施設とされているものがある^⑥。弥高寺は京極氏の城として使われていたことが文献上明らかで、寺自体も戦乱にかかわっている。同じく太平寺も京極氏の館が所在していたこともあり、なんらかの城郭的施設があったものと予想される。長尾寺も、永正年間兵火にかかっており、戦乱に巻き込まれたものと考えられるが、今回の調査においてこのような施設は確認されなかった。強いてあげれば集落と寺院を画すると考えられる断層の存在があるが、十分なものではないであろう。弥高・太平寺の両寺が、中世の一時期に武家勢力によって改修が加わっているのに対し、長尾寺は中世山岳寺院の形態を今に伝えていると言えるのではないだろうか。

以上、弥高寺との比較で、長尾寺遺跡を検討してきた。全体の規模や坊跡の配置など、伊吹山寺としての共通の平面プランが読みとれる。今後、諸般の調査により伊吹山寺の全貌にせまりたい。

また、県内の比叡山寺・己高山寺・大吉寺・金勝寺・金剛輪寺・百濟寺など、他の寺院との比較検討作業も必要であろう。

最後に、長尾寺遺跡は地元大久保区の皆さんの熱意があつてこそ、このように良好な状態で遺されたといえるし、今回の調査もおこなうことができた。厚く感謝するところである。

註

- ① 長尾寺の歴史的環境をまとめるにあたっては、以下の文献を参考にした。

『改訂近江國坂田郡志』1914年

宇野茂樹「伊吹山寺」『柴田實先生古稀記念日本史論叢』1976年

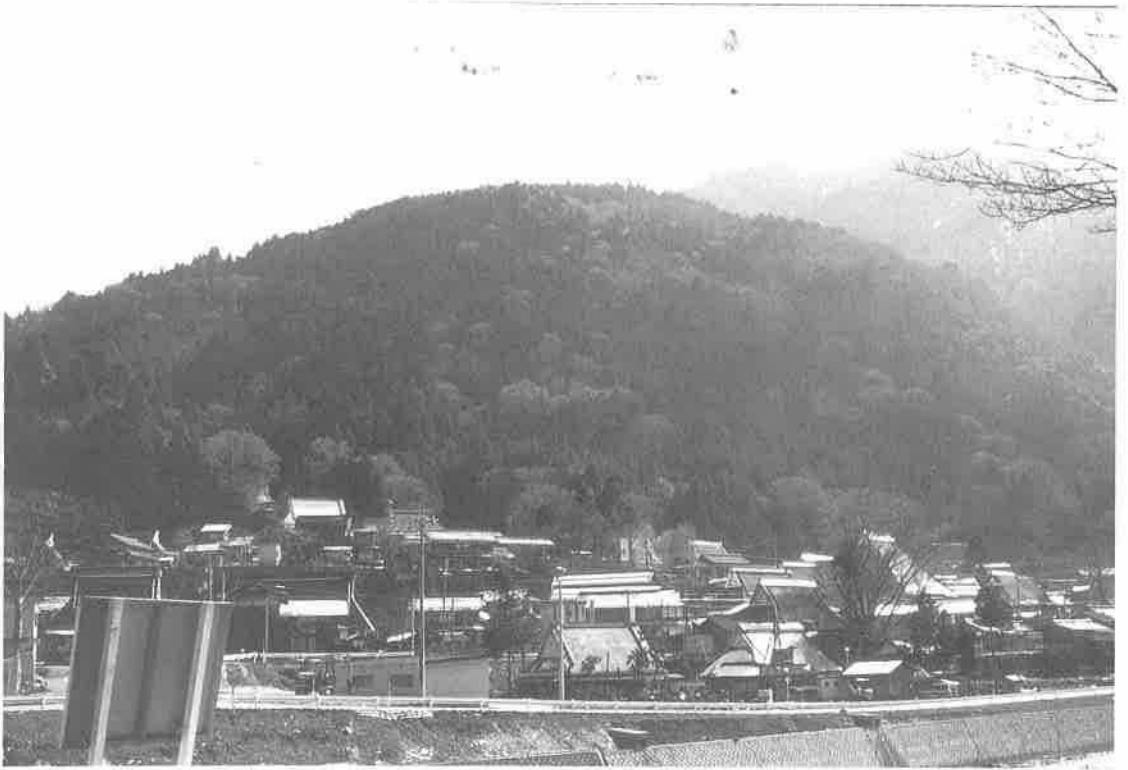
伊吹町教育委員会『伊吹山寺』1977年

「長尾寺跡」『滋賀県の地名』平凡社1991年

用田政晴『弥高寺跡調査概報』伊吹町教育委員会1986年

- ② 註①の用田論文
③ 藤井直正「山岳寺院」『新版仏教考古学講座 第2巻』雄山閣1984年
④ 斎藤忠「寺院跡」『新版仏教考古学講座 第2巻』雄山閣1984年
⑤ 註①の用田論文

版 圖



長尾寺遺跡遠望（後方は伊吹山）



集落と遺跡を画す断層



坊跡と中央の道



歴代住職墓地 (A-5)



南墓地



新昆沙門堂 (B-4)



惣持寺



若宮八幡神社



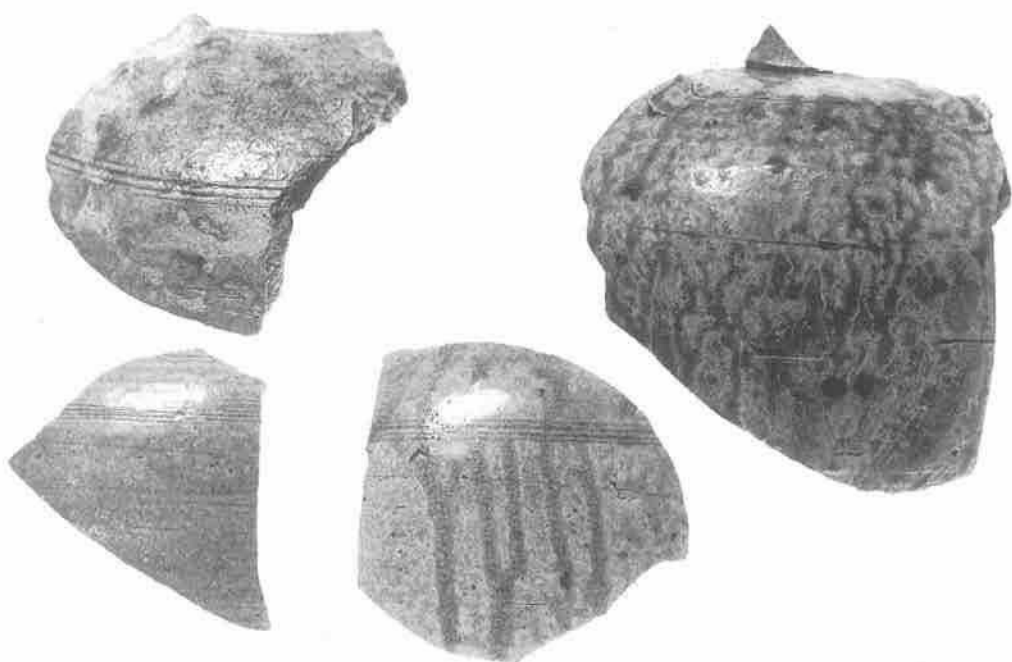
大門跡 (D)



ドウオンジ跡の宝篋印塔



出土遺物



出土遺物

《表紙の色について》

天智天皇の頃、伊吹山に多量のイブキカリヤスが栽培されたと伝えられています。これを染料に使用すると、表紙のような自然のやさしい色あい生まれます。また、町内の代表的な遺跡・上平寺城は「刈安尾城」とも呼ばれました。町の歴史に関わりの深いカリヤスの色を町の埋蔵文化財報告書に用いました。

表紙写真

滋賀県指定文化財 木造天部立像
(平安時代・惣持寺蔵)

伊吹町文化財調査報告書第5集

長尾寺遺跡測量調査報告書

1992年3月

編集・発行 滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会

印刷 垂井日之出印刷

